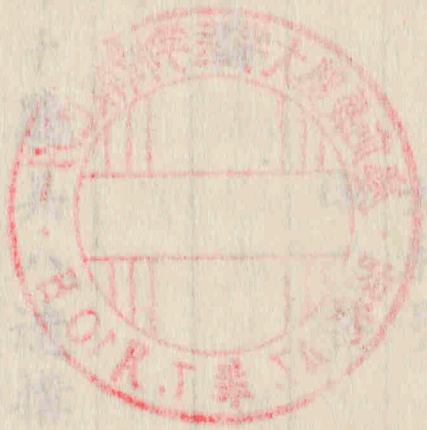


解剖訓蒙

五官論

二十



國立中央圖書館

0215

部列學教類初級初級書  
文部少幼教中級正解

耳部內一依載入之  
外耳中耳內耳

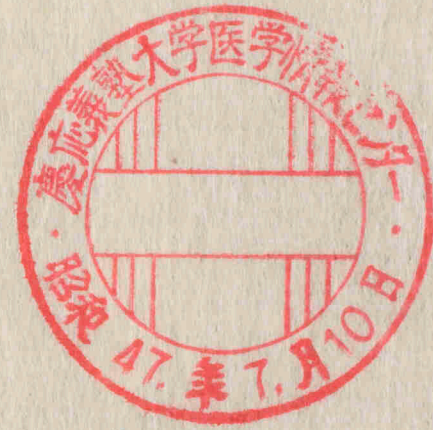
耳部內一依載入之  
外耳中耳內耳

491.1

Ka-2

19

No. 796



富士川文庫

2446

解剖訓蒙卷之二十

米利堅

解剖學教頭約瑟列第著

日本

文部少助教中泉

正譯

五官論

耳

耳

アイ即千聽具ハ造構甚々複雑ニシテ其多分ハ

顛顛骨岩狀部ノ内ニ伏藏ス之ヲ外耳中耳内耳

ニ區別ス

外耳

外耳

ナエキスアテルハ耳廓ト外聽道ヨリ成ル

解剖訓蒙

卷之二十

一

甲 アウリキユラ

耳廓

アウリ

即チ通稱スル耳ハ、下顎關節ト顚顚

骨乳頭部ノ間ニ、外聽道ヲ結合ス其固有ノ形狀

ハ喇叭ノ開端ヲ、外方ヨリ歷平シタル如クニシ

テ、專ラ纖維軟骨ヨリ成ル而テ外面ノ廻轉セル

起線、及ヒ窩ハ、内面、即チ耳背ノ成形ニ反應ス、又

耳垂 ロビト稱スル、下低セル部ハ、皮膚ノ囊ヨリ

成リ、内ニ結締織ト、脂肪織ヲ充填ス

耳廓ノ縁ハ、外聽道ノ上部ヨリ、上后及ヒ下方ニ

彎曲ス、是レ即チ耳輪 ヘリナリ此部ト、溝渠ニ由

テ、隔離スル起線アリ、之ヲ對耳輪 アニチヘト稱

乙 ヒユロス、アウリキユラ

丙 カフリロス

甲 ヒルコス

ス此上部ハ分岐シ、其間ニ、三角形ノ窩ヲ圍擁シ

外聽道口ノ前ニ當テ、圓錐形ノ隆起アリ、之ヲ耳

珠 トト稱ス、又圓形ノ截痕ヲ以テ、耳珠ト隔離

シテ、對耳輪ノ下部ニ、占位スル隆起ヲ對耳珠 ア

ト稱ス而シテ、對耳輪ノ内部ニ於テ、外聽道

ノ口ニ進メル、半螺旋形ノ深凹部アリ、是即チ耳

鼓 カナリ

耳廓ハ、耳垂ヲ除クノ他、悉ク軟骨膜中ニ包裹セ

ラル、纖維軟骨ノ板ヨリ成リ、皮膚ヲ此膜ニ密

着シ此軟骨ニ、數箇ノ裂アリ、結締組織ヲ以テ之

レヲ充ツ、故ニ耳珠ト耳輪起端ノ中間、及ヒ耳輪ノ下端ト、對耳珠ノ間ニハ、纖維軟骨ヲ欽ケリ、又耳珠、耳輪ノ前部ニ於テ短裂アリ、而テ此耳輪ノ前部ニ、小圓錐形ノ隆起アリ、之レヲ耳輪突起ロプト稱ス、セツ、オブ、ゼ、ヘリキスト稱ス、耳廓ノ纖維軟骨ハ、其質薄クシテ、甚々脆弱ナリト雖、自己ノ軟骨膜ニ因テ、頗ル粘稠性ヲ領得ス、此部ノ皮膚ハ、他部ト同シク、細毛ト皮脂腺ヲ裝ス、其腺、耳廓ノ窩中、殊ニ耳鼓ノ部ニ於テハ、發育スル、最モ盛ナリ

耳廓ハ、皮膚ヲ以テ連合スルノ他、又靱帶ニテ頭側ニ附着ス、前靱帶リアンテリオルハ、強剛寬廣ニシテ、耳輪突起ヨリ、衡骨突起ノ根ニ展延ス、后靱帶ポステリオルハ、耳鼓ノ凸隆部ヲ乳頭突起ノ根ニ附着セシム、

耳廓ハ、纖維軟骨ト、皮膚ノ中間ニ於ケル五箇ノ小筋ト、耳廓ヲ頭側ニ結合スル處ハ、三箇ノ稍ヤ大ナル筋ヲ有ス、此諸筋ハ、横紋纖維ヨリ成リ、其作用、甲ハ甚隱微ニシテ、乙ハ全クナシ

甲 耳輪筋

ルスマモ、ラマ、ス、クハ、耳輪起端ノ短矮

甲ハ、ヘリシスマイル

甲ムハリスス、メジヨル

ナル小束ナリ  
大耳輪筋 ル、ドリ、ト、ル、マ、ス、ク、ハ、 耳廓ノ前部、耳輪

乙ムタラギコス

突起上ノ細帯ナリ  
耳珠筋 マ、ス、ク、ル、ヲ、ダ、ゼ、 ハ、耳珠外面ノ纖維ノ端ナ

丙ムアンチタラギコス

ル小板ナリ  
對耳珠筋 ア、マ、ス、ク、ル、ヲ、ダ、ゼ、 ハ、對耳珠ヨリ耳輪ノ

丁ムタラニス、ウ、ル、ソ、ス、ダ  
ウリキエラ

下端ニ展延スル一帯ナリ  
横筋 タ、ラ、ニ、ス、ク、ル、 ハ、稍大ニシテ、耳廓ノ后部ニ  
テ、纖維ノ板ヨリ成リ、耳殼ヨリ展延シテ、對耳輪  
溝ヲ界スル起線ニ達ス

甲ムアウリキユラリス、  
ペリオル

上耳廓筋 ソ、ペ、リ、オ、ル、 ハ、廣薄ニシテ、蒼白

乙ムアウリキユラリス、  
ンテリオル

色纖維ノ扇狀板ヨリ成リ、額枕腱膜ニ起リ、下テ  
對耳輪窩ノ后部ニ附着ス其作用ハ蓋シ耳廓ヲ  
上方ニ引クナラン

丙ムアウリキユラリス、  
ステリオル

前耳廓筋 リ、ア、ン、テ、リ、オ、ル、 ハ、前筋ニ比スレハ、  
著明ナラスシテ、薄キ横向ノ小束ヨリ成リ、顳顬  
莖膜ニ起リ耳輪耳殼ニ附着ス其作用ハ蓋シ耳  
廓ヲ前方ニ引クナラン

后耳廓筋 リ、ホ、ス、テ、リ、オ、ル、 ハ、強剛ニシテ上ノ  
二筋ヨリ稍紅色ヲ呈ス、而テ二三ノ小束ヨリ成

リ、乳頭突起ニ起リ、耳殻ノ后部ニ附着シ其作用ハ、蓋シ耳廓ヲ后方ニ引クナラン

耳廓ハ、血管ト神經ニ富饒シ、其動脈ハ、顳動脈ノ前後兩耳枝ト、外頸動脈ヨリ分派シ來リ、纖維軟骨上ニ於テ顯著ナル網狀ヲ成シ其靜脈ハ、顳靜脈ニ終ル神經ハ、頸神經叢ノ大耳枝ト、顔面神經ノ后耳枝、及ヒ下顎神經ノ耳顳顳枝ヨリ來ル

甲  
三トス、フージトリ  
ス、エキステルノス

外聽道

エキステルナル、フー  
デトレ、ミートス

ハ、耳廓ヨリ延展セ

ル短ナル外部ト、皮膚ノ展延ヲ以テ貼裏シタル

内部ノ骨質聽道トハ二部ヨリ成ル其管耳殻ヨリ鼓室ニ達シ、長サ大約一インチニシテ、内前方ニ向ヒ通過スル中ニ上下方ニ屈曲ス、起端ハ縦橢圓形ヲナシ、中部ハ最モ細狹ニシテ其底ハ鼓膜ヲ以テ閉鎖シ、而シテ耳廓ヲ以テ遮留聚合セル音響ヲ、鼓室ニ傳送ス、此外部ハ、皮膚ヲ除クノ他、上方ニ向テ開裂セ、以纖維軟骨管ヨリ成リ、細片ヲ以テ耳廓ノ纖維軟骨ト連合シ、其裂間ハ纖維膜ヲ以テ充塞シ、之ヲ全管ト成ス、此管ノ外部ト、耳殻ノ中間ニ在ル裂モ、亦々纖維膜ヲ以テ

閉鎖シ、内端ハ環靱帯リアガニメニユトラヲ以テ骨質聽道ノ端ト結合ス

甲 グランジュラ、セルミノサ

乙 セレ

此外部ノ皮膚ハ、較々厚クシテ、許多ノ小毛ト、皮脂腺ヲ具シ其面ニ取腺セクルヲ分泌スルノ腺メセルアリテ、穿點ヲ呈ハス、是取腺メセルヲ分泌スルノ腺ナリ此腺ハ帶褐黄色ノ小圓体ニシテ、皮下組織中ニ包埋セラレ、其質ハ迂曲シ圓体ヲ為セル一條ノ細管ニシテ、其管ノ末端ハ、皮膚ヲ穿テ此腺ノ排泄管トナル

其内部ハ剥露骨ノ外聽道ニ當リ、外部ヨリ尚オ

細長ナリ此部ヲ貼裏セル皮膚ハ、甚薄クシテ、小毛及ヒ腺ヲモ有セス、此底ヲ閉鎖セル鼓膜ト連合ス、此部ノ血管ト神經ハ、耳廓ニ分布スル者ト、同枝別ナリ

中耳

中耳 ミッド アド ハ鼓室ト乳頭洞及ヒ「エウスタキユ

ース管ヨリ成ル

鼓室 ティム ム パ ハ、顛顛骨岩狀部中ノ不整ナル空洞

ナリ、其高サト横徑ハ、共ニ大約半「インチニシテ、

内外ノ直径ハ、纔ニ一二線ニ過キハ此蓋ハ、鼓室  
 ヲ頭顱腔ト分隔スル骨板ニシテ、其牀ハ、内外二  
 壁ノ中間ニ在ル溝渠ナリ此室ノ上後部ニハ、乳  
 頭洞ヲ通シ、前部ハ、狹細トナツテ「エウス」タキキ  
 一ス管ニ遷延ス、而テ外壁ハ、鼓膜ヨリ成リ、内壁  
 ハ、迷路ニ境界ス、

鼓膜

甲ニシテ、鼓室ト  
イムハ、圓形ノ中隔ニシテ、

外聽道ヲ分隔シ、此部ヨリ傳送スル音響ヲ受ク  
 此膜ハ、稍漏斗狀ニシテ扁平ナラス、斜メニ占位  
 シ、外面ハ、凹ニシテ下前方ニ向ス、而テ内面ノ中

甲メデラテ、イムハニ

心ニハ、槌骨ノ手柄ヲ附着シ之レニ其膜ハ、震盪  
 ヲ傳達ス、其周縁ハ、多分細溝中ニ附着シ、此溝、嬰  
 兒ニ於テハ、一箇ノ骨環中ニ在リテ、其環漸次ニ  
 發育スルニ從ヒ、外方ニ延長シ、終ニ骨質外聽道  
 ニ抱合セシ者ナリ

此膜ハ、薄クシテ透明ナル、纖維組織ノ層ヨリ成  
 シ、其外面ハ、外聽道表皮ノ連續ヲ以テ被包シ、内  
 面ハ、鼓室裡粘膜ノ展延ヲ以テ貼裏シ、其纖維層  
 ハ、中心ヨリ放射セル纖維ト、周圍ニ在テ環狀ヲ  
 為セル纖維ヨリ成ル

甲 フロモントリム

乙 フエ子スダスオ、空リス

丙 フエ子スダス、ロキユンダ

丁 マンブラチ、アムパニセ  
コンダリア

鼓室ノ内壁ニ於テ、一箇ノ凸隆アリ、是蝸牛殻ノ  
 突出ニ由テ形成スル〔鼓室岬〕トプロモトナリ此岬  
 背ニ一孔アリ〔卵圓窓〕トオビルトト稱ス、是前庭ニ  
 通スト雖凡、鐙骨ノ底面、常ニ之ヲ閉鎖シ此窓ト  
 岬ノ上部ニ當テ、前ヨリ后方ニ進メル、一ツノ起  
 線アリ、是顔面神經ヲ通スル「ハルロピア」管ノ  
 路ヨリ生シ又岬ノ下部ノ後ヘニ、一ツノ小窩ア  
 リ其底一孔ヲ有シ、蝸牛殻ニ通ス、之ヲ〔圓窓〕トラウ  
ドト稱ス、是亦〔第二鼓膜〕ニセコニメンダレレ、アムパ  
 ヲ以テ閉鎖シ此膜ハ、纖維層ヨリ成リ、外面ハ、鼓

甲 ピラミス

室ノ裡膜ヲ以テ被包シ、内面ハ、蝸牛殻ノ内膜ヲ  
 以テ貼裏シ、鼓室ノ後部ニ下行スル起線アリ、以  
 テ「ハルロピア」管ノ錐穎乳頭孔ニ連続スルヲ  
 示ス、又〔三稜柱〕ト稱スル中空ニシテ圓錐形  
 ナル隆起アリ、此起線ヨリ前方ニ突出ス  
 爰ニ數箇ノ小骨アリテ、鼓室ノ上部ニ占據ス其  
 形狀ノ類似スルヲ以テ之レヲ槌骨、砧骨及ヒ鐙  
 骨ト稱シ各、其順序ニ從テ、互ニ運動關節ヲ為シ  
 槌骨ハ、鼓膜ニ附着シ、鐙骨ハ、卵圓窓ニ連リ各骨  
 ノ聯續ニ由テ、膜ノ震盪ヲ此窓ニ傳達ス

甲 マルレウス

槌骨 <sup>マル</sup>ハ、其位置直立ス、而テ其頭ハ鼓室ノ上

部ニ在リ、其手柄ハ、鼓膜中心ノ纖維層中ニ下沈

ス、頭 <sup>ド</sup>ハ圓形ヲ為シ、其後部ニ軟骨ヲ以テ被包

セル楕圓ノ關節面アリ、之レニ由テ砧骨ト連接

ス、手柄 <sup>ド</sup>ハ、稍、捻聚收縮セル細長ノ突起ナリ

頸 <sup>キ</sup>ハ、纒ニ絞盪シテ、二箇ノ突起ヲ生ス、長突起 <sup>丙</sup>

ロシグ、ハ、細キ棘ニシテ、頸ヨリ殆ト直角ニ突

出シ、淺窩裂ニ入ル、短突起 <sup>シ</sup>ハ、頸根ニ於

ケル圓錐形ノ隆起ニ過キス

砧骨 <sup>ア</sup>ハ、乳頭洞口ノ近傍ニ於テ、槌骨ノ後ハ

乙 マニユブリユム

丙 フロセツス、ロシグ

丁 フロセツス、アレウキス

戊 インコス

甲 ラモス、ホリソニタリス

乙 ラモス、ウルクカリス

丙 ラス、オルビキユテール

丁

戊

己

庚

辛

壬

癸

甲

乙

丙

丁

戊

己

庚

辛

壬

癸

甲

乙

丙

ニ列ス其體 <sup>ボ</sup>ハ、不整ノ方形ニシテ、前部ハ楕

圓ノ關節面ヲ有シ、槌骨ノ頭ト联接ス、後部ハ分

岐セル一對ノ突起ヲ生ス、而テ其下部ニ在ル者

ヲ長シトス、即チ短突起 <sup>甲</sup>ハ、後方ニ突出

シ、靱帶ヲ以テ、鼓室ノ後部ト結合ス、長突起 <sup>乙</sup>

ハ、細長ニシテ屈曲シ、槌骨ノ手柄ト、殆ント

平行シ下ル、其末端ハ、内方ニ鐙骨頭ト联接スル

環狀突起 <sup>丙</sup>ハ、保持ス、嬰兒ニ於テハ、此

突起、一箇ノ別骨ナレバ、砧骨ト同シク、速ニ化骨

メ抱合セシ者ナリ

甲ステーフス

燈骨<sup>甲</sup> レストハ、地平ニ位シテ、砧骨ヨリ内方卵窓  
 ニ向ス、其頭<sup>ドヘ</sup>ハ、扁平ニシテ、頂端ニ、軟骨ヲ以テ  
 被包セル、凹ノ関節面アリ、砧骨ノ環狀突起ト聯  
 接ス、此頭ヨリ一對ノ脚<sup>エクリ</sup>ヲ生ス、是内方ニ彎  
 曲シテ、卵窓ニ附着セル底面<sup>スヘ</sup>ニ結合ス  
 今記セル三骨ハ、囊鞞帶ニ由テ圍擁セラレ、関節  
 膜ヲ以テ貼裏スル所ノ運動関節ヲ有ス、其槌骨  
 ト砧骨ノ間ニ在ル者ハ、鉸鈕関節ニシテ、砧骨ト  
 燈骨ノ間ニ於ケル者ハ、杵臼関節ナリ  
 槌骨懸鞞帶<sup>トリス</sup> ガメンソレハ、纖維ノ細帶ニシテ

乙リガメントムソヘリオリス

此骨頭ヨリ鼓室蓋ニ展延ス  
 砧骨懸鞞帶<sup>トリス</sup> ガメンソレハ、此骨ノ短突起ヨリ  
 鼓室ノ后部ニ展延ス  
 燈骨環鞞帶<sup>リア</sup> ガメンユトスハ、此骨ノ底面ヲ卵窓  
 ノ縁ト結合セシム  
 爰ニ三箇ノ小筋アリ、横紋纖維ヨリ成リ、上ノ諸  
 骨ニ結合シテ其運動ヲ主宰ス  
 緊張筋<sup>アス</sup> クソルハ、エウスタキユース管ノ軟骨端  
 ト、蝴蝶顚顚兩骨ノ近傍面ヨリ起リ而テエウス  
 タキユース管上部ノ顚顚骨管ヲ通過スル后矢腓

甲リガメントムソヘリオリス

乙リガメントムソヘリオリス

丙ムテンテ、アム、パニ

甲ムレキヤトルヲムハニ

ニ化シ、鼓室ニ入り、外方ニ廻轉シテ、槌骨ノ頸ニ  
附着ス。此作用ハ、鼓膜ノ緊張ヲ増加ス。

弛緩筋マレスキヤトルハ、蝴蝶骨ノ棘狀突起ニ起リ、

上外方ニ進ンテ、淺窩裂ニ入り、槌骨ノ長突起ニ

附着ス。其作用ハ、鼓膜ヲ弛緩ス。

鐙骨筋スマタスペジユハ、三稜柱ノ腔内ニ起リ、鐙骨

頭ニ附着ス。其作用ハ、常ニ鐙骨底ノ卵圓窓上ノ

壓ヲ主宰ス。

其他往々小鼓膜弛緩筋パレキマイトルト稱ス

ル一筋ヲ記載スレド、尋常其存在スルヲ見ス。

乙ムハスタヘジユス

鼓室空洞ハ、悉ク軟弱ナル粘膜ヲ以テ貼裏ス。此

膜又小骨ヲ被包シ、鐙骨ノ孔中ニ延張シテ、又諸

筋及ヒ靱帶ヲ被包ス。此膜小血管ニ富饒スルヲ

以テ薔薇色ヲ呈ハシ、磚狀内皮ヲ裝セリ。

鼓室ノ動脈ハ、微細ナリト雖モ、甚ク多アリテ、

内頸動脈ノ鼓室枝、錐穎乳頭、大脳膜、下行口蓋ノ

三動脈、及ヒ内頸動脈ノ其管ヲ通遷スル部ヨリ、

分岐シ來ル靜脈ハ、大脳膜靜脈ト、咽頭靜脈ニ通

シ、又淺窩關節近傍ノ靜脈叢ヲ以テ、内頸靜脈ニ

合ス。神經ハ、舌咽頭神經ノ鼓室枝、及ヒ交感神經

甲  
マストイドセルス

ノ頸鼓ヨリ來ル

乳頭洞

サマストイドセルス

ハ顛顛骨乳頭部内ニ於ケル

許多ノ不整ナル空洞ヨリ成リ、大孔ヲ以テ鼓室ノ上后部ニ通ス此洞ハ悉ク磚狀内皮ヲ裝セル軟弱ノ粘膜ヲ以テ貼裏ス

エウスタキユース管ハ喇叭狀ニシテ其長サ一

センチ半余アリ、鼓室ノ前部ヨリ、斜メニ内前下方

ニ向ヒ、咽頭ニ展延ス此管ハ二部ヨリ成ル其上

部ハ顛顛骨岩狀部ノ骨管ヨリ成リ、外端ハ鼓室

ニ通シ漸々内方ニ向テ細狭トナリ、内端ハ同骨

鱗狀部ト、岩狀部ノ中間ノ角ニ於テ他ノ一部ト

抱合ス其下部ハ長クシテ、此角ヨリ、蝴蝶骨ノ后

縁ニ從テ内翼狀突起ノ内側ニ進ム、此通過ノ間、

管ノ横徑漸次ニ擴張シ、直キニ后鼻孔ノ后へ、咽

頭ノ側部ニ至リ、突出縁ヲナシ、貝殼骨ノ高サト

均シキ位置ニ於テ、卵圓形ノ孔ニ終ル此部ハ三

角板狀ノ軟骨屈曲シテ溝狀ヲナシ、外方ニ開裂

スル者ヨリ成ル、然レ其裂間ハ、纖維膜ヲ以テ閉

鎖シ之レヲ全管ト爲ス

此管ハ、顛毛内皮ヲ裝セル粘膜ヲ以テ貼裏シ、其

膜咽頭及ヒ鼓室ノ粘膜ト連合ス

内耳

内耳 ナイルイアル ハ迷路ト内聽道ヨリ成ル

迷路 ミリス トハ其複雑ナル形狀ニ因テ名クル

者ニシテ、聽神經ノ分派ヲ悉ク此部ニ函三以テ

聽具ノ最要部ヲナス而テ顛顛骨ノ岩狀部中ニ

圍容セラレ、其前庭、半規管、及ヒ蝸牛殼ト稱スル

三部相合シテ之レヲ成ス此部ハ唯空洞ト為シ

テ記載スヘシト雖、之レヲ圍擁スル骨質造構

ノ他、其固有スル骨壁ヲ知ルヲ要ス嬰兒ニ於テ

甲ミリン

甲ミリン

乙ミリン

丙ミリン

丁ミリン

ハ、此外圍ノ骨質緩鬆ナレハ、其壁容易ニ鑿入ス

ルヲ得、然レ發育ノ后ハ、骨質緻密トナリ、迷路ノ

外壁ト錯合ス

前庭 ゴリスチビ ハ、鼓室ト内聽道底ノ中間ニ於ケ

ル、不整ナル楕圓ノ空洞ニシテ、半規管ヲ后外方

ニ結合シ、蝸牛殼ヲ前内方ニ連合シ、而テ卵圓窓

ヲ其外壁ニ穿テ、以テ鼓室ニ通ス

前庭ニ、半輪狀ノ幽微ナル起線 クレスト アリ、其床ニ

起リ、内壁ヲ上テ蓋ニ達シ、小 三丙 稜隆起 ヒピラ 三子

ニ終ル此隆起ハ、内聽道ニ貫通セル上篩狀點

解剖訓蒙

甲 ホツハ、ミエ五リカ  
乙 ホツハ、ミエ五リカ  
フチカ

丙 マキユラ、ク、プロサメ  
シテ

ソペリオオ、ル、クリフ、ト稱スル、細孔ノ第一聚簇ヲ  
 リヲ、一ム、ス、ポット、ト稱スル、細孔ノ第一聚簇ヲ  
 呈ハス、此起線ハ、前庭ヲ二部ニ分隔ス、其形狀ニ  
 從ヒ、一ヲ半球形窩クハ、ホツサ一ヲ半楕圓狀窩  
 へ三エ、ル、ホツサ、ト稱ス、甲ハ小ニシテ、前庭ノ前内  
 部ニ在リ、乙ハ、其后外部ニ占據ス、半球形窩ノ中  
 心ノ直下ニ、内聽道ニ貫通セル細孔ノ第二聚簇  
 アリ、之ヲ中篩狀點ニ、ホツサト稱ス、又此  
 部ヲ過レハ、直チニ蝸牛殼前庭階ノ口アリ、前庭  
 ニ通ス、半楕圓狀窩ニハ、半規管口ト、小血管孔ヲ  
 開ク、此孔ハ、顛顚骨岩狀部ノ后面ニ通スル者ニ

甲 ホツハ、ミエ五リカ  
乙 ホツハ、ミエ五リカ  
フチカ

シテ、前庭靜脈ヲ下岩狀竇ニ通過セシム  
 半規管セ、カ、ナ、ル、キ、ユハ、其數三個アリ、前庭ノ后  
 外方ニ當テ、鼓室ノ内后部ノ上ニ位ス、之レヲ其  
 位置ニ從テ、上管カ、ナ、リ、オ、ル、后管カ、ナ、リ、オ、ル、及  
 ヒ下管カ、ナ、リ、オ、ルト稱ス、前ノ二箇ハ直立シ、后  
 へノ一箇ハ地平ナリ、而テ各相關係スル方向ハ、  
 散子体ノ内后下、三面ノ對向スルニ比ス可シ  
 此三管ハ、各半環狀ニシテ、一端ハ耳壘ア、ム、ヒ、ト  
 稱スル膨大ヲ有シ、以テ前庭ニ開口ス、他端ハ膨  
 脹セシテ、其二箇ハ相合シ、他ノ一箇ト共ニ、亦

夕前庭ニ開口ス、故ニ三管上ニ五六口ヲ以テ前庭ニ通ス

右半規管ノ壘中ニ、内聽道ト通スル、細孔ノ第三

聚簇アリ、之ヲ下篩狀點イグリ石五リ五ム五ス五ボ五ト五ト五稱

セリ

前庭及ヒ半規管ノ内部ハ清膜狀ノ軟弱膜ヲ以

テ貼裏ス、此膜ハ骨面ニ粘着セル纖維層ノ骨膜

ト、無組織基礎膜層ト磚狀内皮トヨリ成ル膜内

ノ空洞ハ、清液ヲ以テ充ツ、此液ヲ外液二ペ二フリ二ト

稱ス、是レ所謂膜質迷路ラメンランラツラノラスラ、ヲ圍擁

甲 マキユエ、ク、フ、ロ、イ、  
ン、五、リ、オ、ル

乙 リ、コ、ル、ユ、ト、シ、ニ

甲 乙、カ、キ、ヨ、ス、ス、五、リ、ユ、ス

乙 乙、カ、キ、ヨ、ス、ス、五、リ、ユ、ス

丙 エ、ド、リ、ン、テ

スレハナリ、此迷路ハ、前庭中ニ抱容セラレ、一

對ノ小囊ト半規管内ニ入テ、其骨管ト同形ヲ成

セル、膜質半規管ヨリ成ル、其囊ノ一ヲ球形小囊

ス、五リ五ク五ル五ト五稱五ス、稍小ニシテ、半球形窩ヲ盈填

ス、一ヲ楕圓狀小囊ルエルキリユクトクトク稱ス、稍大ニ

シテ、半楕圓狀窩ヲ充塞ス、是レ膜質半規管パメン

ノ一ス、セミシルキニ連合スルノ部ナリ

膜質迷路ハ磚狀内皮ヲ貼裏セル、纖維樣造構ヨ

リ成リ、内液リエンドト稱スル液ヲ充ツ

内聽道神經ノ前庭枝ラズラチンビユハ、膜質迷路ニ

分布メ、外液中ニ浮遊ス此神經ハ、内聽道底ニ於  
 六三枝ニ分岐ス、其一ハ、上篩狀點ヨリ前庭ニ入  
 リ、橢圓狀小囊ト、上下半規管壘ニ分布シ、其二ハ、  
 中篩狀點ニ入り、球形小囊ニ分布シ、其三ハ、下篩  
 狀點ニ入り、後半規管壘ニ分布ス

甲  
 フトリシ

前庭ニ、結晶細分子ヨリ成レル、二箇ノ塊アリ之  
 ヲ<sup>甲</sup>耳石<sub>テラス</sub>ト稱ス其色白ク、其形ハ扁圓、其質  
 ハ炭酸石灰ニシテ、許多ノ動物之レヲ有スルヲ  
 見レハ、聽具造構ニ、最要ナル一箇ノ原質タルヤ  
 知ル可シ其部ハ、篩狀點ヨリ、神經纖維ノ穿入點

甲  
 コクハ、迷路ノ内部ニシテ、其形チ、蝸牛ノ

ニ當テ、二箇ノ小囊ノ内面ニ粘着ス、是レ蓋シ各  
 小囊ニ分布セル、神經纖維ニ觸接スルナラン  
 前庭ト半規管ノ動脈ハ、前庭神經ノ諸枝ニ伴行  
 セル、内聽道動脈ノ前庭枝ヨリ分岐シ來ル其靜  
 脈ハ、一ハ蝸牛殼ノ靜脈竇ニ終リ、一ハ下岩狀竇  
 ニ通スル所ノ前庭靜脈ニ終ル

蝸牛殼<sup>甲</sup>リコクハ、迷路ノ内部ニシテ、其形チ、蝸牛ノ

殼ニ類似スルヲ以テ、其名稱トス、底面ハ、内聽道

ノ底ニ附接シ、尖端ハ、少シク前方ニ向ヒ、稍外方

ニ傾斜ス、大約一インチ半ノ骨質管ニシテ、中軸

アキノ周圍ヲ殆ント三廻シ、廻轉中漸次ニ、其軸ヲ上進ハ此管ノ起端ハ前庭ノ前部ト結合シテ鼓室ノ岬ヲ成ス、其廻轉右耳ハ左旋シ、左耳ハ之レニ反ス、其端ハ、殼蓋ト稱スル盲端ニ終ル是レ頸動脈管ノ上行部上ニ於テ殆ント顛顛骨岩狀部ノ前面ニ達スル者ナリ

甲  
コロム、コクリ

蝸牛殼軸アキコクリス、オダハ、圓錐形ニシテ、底面ハ内聽道底ノ螺旋根ヲ成シ、尖端ハ蝸牛殼管ノ最終廻轉ノ内壁ト連合ハ此軸ハ、螺旋根ノ孔ト、連續セル夥多ノ細管ヲ通シ、蝸牛殼神經ノ纖維ト、

甲  
コロム、コクリ

内聽道動脈ノ蝸牛殼枝ヲ、共ニ通過セシム、其中心ノ一管ハ、他管ヨリ大ニシテ軸ノ全徑ニ瀰タリ、上ノ動脈一枝ヲ通ス

骨質螺旋板コクリイラシユリス、スパハ、直チニ前庭ノ半

球形窩ノ下ニ起リ、大約蝸牛殼管ノ半徑ヲ横斷シテ、其軸ヲ旋廻シ管ノ頂端ニ至リ、尖銳突起ニ終ル

此板ハ、許多ノ微細ナル合吻管ヲ通ス、是レ蝸牛殼管ノ管ニ聯接スル者ニシテ、其口ヲ此板ノ遊離縁溝中ニ開ク



孔中ニ入ル此纖維ハ蝸牛殻軸ノ細管ヲ上ルニ  
 隨テ外方ニ向ヒ骨質螺旋板ニ迸射ス而テ其板  
 中ニ錯蔽ヲ造リ其遊離縁近傍ニ於テ神經細胞  
 ノ列ト混合ス是ヨリ又神經纖維膜質螺旋板ニ  
 遷リ此部ニ於テ固有ノ神經細胞ヲ相共ニシテ  
 複雑ノ形狀ヲ為ス然レモ其性質ニ至リテハ未  
 タ確定スルヲ得ス

蝸牛殻ノ動脈ハ專テ内聽道動脈ノ蝸牛殻枝ヨ  
 リ來リ已ニ説示セシ如ク同名神經枝ノ通過ニ  
 伴行ス此動脈ハ蝸牛殻ノ裡膜ト螺旋板ノ毛細

管網ニ終リ是ヨリ靜脈ヲ生シテ蝸牛殻軸内ノ  
 螺旋狀靜脈竇ニ結合ス又此竇ハ一ツノ靜脈ヲ  
 以テ下岩狀竇ニ通ス

内聽道 甲 シ イ ン テ ル ト ニ ル ト ス ハ 長 サ 大 約 四 分 イ ン

甲  
 三ト今トシテリ  
 テス

子ノ三ニ居ル圓筒狀管ニシテ顛顛骨岩狀部ノ  
 後面ヨリ迷路ニ向ヒ斜メニ下前外方ニ進ム其  
 底ニ横行セル新月狀ノ起線アリテ此管ヲ横断  
 シ不齊ノ二部ニ分ツ其上部ニハ又縦向ノ起線  
 アリ之レヲ二箇ノ小窩ニ別ツ其内部ノ者ハ顔  
 面神經ヲ通スルハルロビヤン管ノ起端ニシテ

甲  
タラクトススパイラリ  
スヲラミノロソス

外部ノ者ハ前庭ノ上篩狀點ニ當リ、此孔ヨリ前庭神經ノ上枝ヲ楕圓狀小囊ニ通シ下部ハ大ニシテ、其内方ハ螺旋根タスパイラルヲ以テ充占シ、蝸牛殼神經ヲ通スル、無數ノ細孔ヲ有ス、外方ハ中篩狀點ニ當リ、前庭神經ノ下枝ヲ球形小囊ト、上下半規管壘ニ通スルノ部ナリ、又内聽道ノ後壁ニ小管アリ、前庭神經ノ後枝ヲ後半規管壘ノ下篩狀點ニ通過セシム

内聽道ハ聽神經ト、顔面神經、及ヒ内聽道動脈ヲ通ス、顔面神經ハハルロピヤン管ニ入り、通過ノ

後チ、錐穎乳頭孔ヲ出ツ、聽神經ハ蝸牛殼神經クコ

ルガ子ト前庭神經ラズチビエトノ二枝ニ分岐

ス、甲ハ、無數ノ纖維ニ分解シ、螺旋根ノ孔ニ入り、

分布スルノ上ニ示セル如シ、乙ハ三枝ニ別レ、無

數ノ纖維ニ分解シ、三箇ノ篩狀點ヲ通ス、是亦上

ニ記載セシ如シ

内聽道動脈ハ、基礎動脈ノ一枝ニシテ蝸牛殼枝

ト前庭枝ニ支別シ、同名神經ト同行ス

皮膚及其附屬

皮膚スキハ觸官ノ具ニシテ、健康ノ状態ニテハ

甲  
スキユキス

其性、疼痛ノ感覺最モ敏捷ナリ、由テ生活ヲ損害  
シ、或ハ破壊スヘキ外襲ヲ避ケ、又其特異ノ造成  
ニ由テ、体中諸液ノ蒸發ヲ防ク、然レモ他器ト関  
涉シテ、其液ノ剩餘ヲ排泄スルニテ、其最モ露呈ス  
ル部ハ、亦夕隨テ厚シ、乃チ背部、四肢ノ外部、手掌  
及ヒ足蹠ニ於ケル如シ、又夕眼瞼、口唇、陰莖前皮  
ノ内面、及ヒ龜頭ニ於テハ、最モ薄シ  
皮膚ハ、適宜ニ延長シ、撓屈シ、稍彈カヲ有シ、且ツ  
半透明ニシテ、其色ハ、人種及ヒ各人ニ由テ異ナ  
リ、殊ニ手掌及ヒ足蹠ニ於テハ、平行セル微細ノ

起線ヲ密布ス、是レ多分ハ、曲線ニ列シテ、特異ノ  
正形ヲ呈ス、其他部ニ於テハ、網狀ノ細溝ト、毛窩  
ヲ呈ハシ、又屢皺襞ヲ造リ、或ハ屈伸スルノ部ハ、  
多少粗襞ヲ生ス、乃チ額及ヒ許多ノ關節ノ周圍  
ニ於ケル如シ、

皮膚ハ、主タルニ層ヨリ成ル、即チ真皮及ヒ表皮  
ナリ、又夕二種ノ腺ト、二類ノ附屬ヲ具ス、即チ汗  
腺、皮脂腺、及ヒ爪毛ナリ、以下之ヲ辨説ス

真皮<sup>甲</sup>ニ<sup>三</sup>デ<sup>ル</sup>ス<sup>三</sup>ハ、皮膚ノ深層ヲ為シ、身体中皮膚ノ最  
モ厚キ部ハ、亦隨テ厚シ、乃チ眼瞼ニ於テハ、其厚

甲  
テルマ

解剖学

積、大約六分線ノ一ニシテ、体ノ前部ニ在テハ、四分線ノ一ヨリ半線ニ至リ、背部ト足踵ニ於テハ、半線ヨリ一線半ニ至ル、而テ婦人ハ、男子ヨリモ薄ク、小兒ハ、大人ノ半積ニ在リ、又老年ニ近ケハ、逐次ニ薄變ス、其色、薔薇様ノ乳油色タリ、然レモ部位及ヒ血管ノ多少ニ隨テ、色ノ淡濃ヲ異ニシテ、造構ハ、主モニ纖維組織束ノ銳角ヲ為シテ、密ニ縱横間錯セシ者ヨリ成リ、且ツ稍、彈力組織ヲ混合ス、此組織ハ、体ノ前部ト、關節ノ周圍ニ取モ多ク、其他、無紋ナル筋纖維ヲ含ム、此纖維ハ、真皮ノ

ノ上部ヨリ、毛胞ノ底ニ下ル、故ニ寒冷、電機、或ハ驚愕ノ感動ヲ以テ、此筋纖維ヲ興奮シテ、收縮セシムレハ、彼ノ毛胞ヲ舉上シテ、所謂鳥肌ヲ呈發ス、

真皮ハ、其外面ニ近ケハ、取モ緻密ニシテ、無組織層、即チ基礎膜ヲ以テ、限界ス、其内面ハ、表在莖膜ノ脂肪層ノ結締組織ト連合シ、或ハ其脂肪層無キノ部ハ、結締組織ニ由テ、表在莖膜ノ深層、或ハ其他下部ノ造構ニ粘着ス、而テ此結締組織ハ、緩鬆ニシテ、多少延長性アリ、乃チ皮膚ヲ前後ニ運

甲ハヒラタクトス

動セシム、若シ此内面遊離シテ結合セサルハ、粗ナル網狀ヲ為シ、其細眼ハ、脂肪組織ノ小圓体ヲ以テ充盈ス外面ニハ饒多ノ微突起ヲ具ス、其機能ニ就テ之ヲ觸覺乳膏ルタクチラト稱ス、其數及ヒ發育ノ度ハ、体中ノ部位ニ隨テ差異アリ、乃チ手掌ト足蹠ニ於テハ、冢モ多ク且ツ長久而テ皮膚面ノ微細ナル起線ニ應スル真皮ノ起線上ニ占位シテ、二重ニ並列ス又夕陰莖ノ前皮、龜頭小陰唇、肉様尖、及ヒ乳房ニ於テ數多アリ、其他ノ部ニテハ、甚夕隔離シテ、僅カニ發育シ且ツ顔面

ニテハ殆ト缺ヒセリ

件ノ乳膏、冢モ巨大ニ發育セシ者ハ圓錐形ニシテ、單一ノ者アリ、又複合ニシテ一箇ノ底面ヨリ、二三余、發生スル者アリ、發育不全ノ乳膏ハ乳房狀、即チ疣狀ヲ為シ、又逐次ニ唯夕真皮面ノ微弱ナル起線ニ化ス、此乳膏、手掌及ヒ足蹠ニ於テハ、其丈ケ三十分線ノ一ヨリ十分線ノ一ニ至リ、又他部ニ於テハ、三十分線ノ一ヨリ八十分線ノ一ニ至ル、此乳膏ハ無組織基礎膜ヲ以テ限界スル、真皮ノ纖維様造構ノ連續ヨリ成リ、皮膚神經ノ

末端ト弥狀毛細管ヲ受容シ、又手掌ト足蹠ニ於  
 ケル、或ル乳管中ニハ、所謂觸覺球ルタクキル  
 ナル者、即チ一種固有ノ体ヲ含有ス  
 真皮ハ、血管、水脈、及ヒ神經ニ富饒ス、皮膚動脈ハ、  
 其下部ヨリ入り毛細管網ト為リテ終リ、真皮ノ  
 表面ニ近ツクニ隨テ愈々密接シ、此管網ヨリ、弥狀  
 ノ單管ヲ出シテ、觸覺乳管ニ送ル、又皮膚ヨリ出  
 ツル靜脈ハ、其動脈ヨリモ、尙ガ大且ツ數多ニシ  
 テ皮下ノ表在靜脈幹ニ終ル、水脈モ、亦々真皮中  
 ニ、複雑ノ網狀ヲ為シ、体軀及ヒ四肢ノ前内部殊

二手掌足蹠ニ於テ取モ數多ナリ、又神經モ、饒多  
 ニシテ種々ノ皮支ヨリ來ルヲハ、既ニ神經篇ニ  
 記セリ、而テ此神經ハ、真皮ノ表面ニ蔓延シテ觸  
 覺乳管ニ入ル、然レモ其末端ノ景況ハ、未タ明瞭  
 ナラス

真皮ヲ煮レハ、溶解シテ膠質ト為ル、諸術ニ採用  
 スル膠類ハ、獸皮ノ切片ヨリ產生スル多シ、又之  
 ヲ鞣スルハ、鞣革ト為リ、或ハ脂肪、及ヒ其他ノ諸  
 質ヲ除奪シテ適宜ニ薄片ト為セハ、羊皮紙ト為  
 ル、此革片ノ截端ト、粗糙面ハ、真皮ノ纖維様造構

ヲ示シ其滑澤ナル外面ハ毛胞ノ口乳管及ヒ他ノ微痕ヲ呈ハストス

表皮

甲キユキユラ

表皮

ル<sup>エ</sup>ピ<sup>テ</sup>ハ皮膚ノ表層ヲ成シ其真皮ト相関

係スルヲ猶オ内皮ノ粘膜ニ於ケルコトク此層

手掌足蹠ニ於テハ最モ厚クシテ十分線ノ一ヨ

リ一線余ニ至此其他部ニ於テハ甚々薄クシテ

大約六十分線ノ一ヨリ十分線ノ一二至此然レ

此厚薄ハ半ハ其平常徒属スル壓力ト摩擦ニ

歸ス故ニ奴隸ノ手掌及ヒ農夫ノ足蹠ノ如キハ

愈厚シ又肉刺ハ過度ノ壓力ト摩擦ヲ受ケテ硬

變シタル表皮ノ一局部ニシテ啻ニ足部ニ生ス

ルノミナラス間、沓工ニ於テハ其膝頭兵卒ニ於

テハ其鎖骨前部ニ生ス是レ其業營ニ由テ然ル

ナリ肉刺ノ為メニ屢疼痛ヲ發スルコトアリ是レ

其壓力ニ由テ知覺敏捷ナル真皮ニ嫩衝ヲ起サ

シムルナリ猶オ砂石ノ竄入ニ由テ發スル景况

ノ如シ

表皮ハ全ク血管ヲ有セス自己ノ榮養液ヲ真皮

ノ血管ヨリ吸収ス又々神經ノ分布ナキカ故ニ

全ク知覺アラズ、然レモ、壓力ニ因テ、甚々敏捷ナル真皮ニ、諸感ヲ通達シ、且ツ其柔軟ナル造構ノ毀傷、及ヒ乾燥ヲ防禦ス、故ニ若シ表皮ヲ剥離セハ、唯々大氣ニ觸レルノミニテ、真皮ニ激衝ヲ起スニ足リ、又タ死后ニテハ、速ニ乾燥スル者ナリ、表皮ハ、全ク各異ノ二層ヨリ成ル、即チ表層及ヒ軟層是ナリ、

表層

ギユチ

ハ、殆ト乾燥シ、稀黄色ニ透明ナル角質様ノ膜ナリ、肉刺ノ生セシモ、其薄片ヲ以テ、微

知シ得ルナリ、深部面ハ、軟層ト連合シテ、是ヨリ

甲キユキユラ

常ニ補給シ、又タ隨テ其表層ノ面ヨリ、次第ニ老

廢シ、所謂鱗屑ト為テ剥脫ス、許多ノ下等動物、例

之ハ蛇類ノ如キハ、時アリテ、其全形ヲ脱衣ハ、此

層ハ、其部ノ厚薄ニ從テ、微細ナル鱗屑ノ數板ヨ

リ成ル、是レ全ク扁平ニシテ、殆ト乾燥セル有機

セシナリ、此セルハ、粒狀物ノ少量ヲ含ミ、尋常核

ヲ有セズ、然レモ、屢、此層ノ深部ニ於ケル者ハ、核

ノ殘餘ヲ含メリ、

件ノ鱗屑ヲ、剥荅スノ溶液ニ浸セハ、各箇ニ遊離

シ、膨脹シテ、殆ト球形ノ胞ト為ル、故ニ亞爾加里

ノ溶液ハ、表皮ヲ剥除スルナリ、又々發胞膏或ハ  
 火傷ハ、真皮ノ嫩衝ヲ起シ、液ヲ滲出セシメ、其液  
 軟層ヲ破リテ、表層ヲ上壓シ、即チ水胞ヲ生セシ  
 ム  
 死后、皮膚ヲ浸漬スレハ軟層ノ分解スルニ隨ヒ  
 表層ハ、真皮ヨリ遊離シ然レ共表層、尙チ自己ノ形  
 狀ヲ保ツニ、充分強ク且ツ厚ケレハ、大ナル片々  
 ヲ為シテ剥除スルヲ得ヘシ、故ニ容易ニ、手ヨリ  
 手<sup>テ</sup>套<sup>キ</sup>ノ如ク、剥離スルヲ得ル者ナリ

軟<sup>甲</sup>層<sup>ミ</sup> ソフト、エビ<sup>レ</sup>デル<sup>エ</sup>ル<sup>ル</sup> ハ、柔粒狀物ト核ヲ含ム軟

甲<sup>リ</sup>テ、<sup>ミ</sup>ユ<sup>コ</sup>ソ<sup>ム</sup>

弱ナル、多角セルノ數板ヨリ成ル而テ其セルノ  
 上層ハ漸次ニ扁平ト為リ、常ニ表層ノ較乾燥ス  
 ル鱗屑ニ變形シ、又々從テ真皮面ヨリ、之ヲ補給  
 ス

白哲人種ニ於テハ、彼ノ軟層無色ニシテ透明ナ  
 ルヲ、猶チ表層ノユトシ、故ニ真皮ノ色ト、爰ニ分  
 布スル血管ヲ透見セシム黑人種ニ於テハ、其セ  
 ル殊ニ深部ニ在ル者、褐色或ハ黒色素質ヲ充滿  
 シ此人種ノ微色ヲ與致ス此色素ノ小量ハ、自餘  
 ノ人種、及ヒ各人ノ容色ヲ呈ハシ、然ルノミナラ

一人上ニテモ皮膚ノ各部ニ種々ノ色彩ヲ生  
ス、雀斑ハ其色素ノ發育、即チ増盛ニ歸シ、黒子ハ  
其一點ニ聚積セシ者ナリ、然レモ此軟層變形シ  
テ表層ニ遷レハ此色素質ハセリヨリ消失ス

汗腺

汗腺 ダス 汗腺 大概皮膚ノ諸部ニ存在シ、其全  
數大約一百万ニ滿ツ其色、帶黃赤色ニシテ殆ト  
圓形ヲ為シ、直徑ハ大約六分線ノ一ニシテ、真皮  
ノ深部ニ於ケル間隙中ニ占位シ、尋常脂肪組織  
ヲ以テ圍擁シ、此腺ハ各卷廻シテ、一ノ球形ヲ為

甲  
カ  
ラ  
シ  
ミ  
エ  
タ  
リ  
レ

セシ一管ヨリ成リ、其端汗管 ダク ト ト為リ、稍

ヤ迂曲シテ、真皮ノ外面ニ上ル、此管ハ基礎膜層  
ヲ以テ限界スル、纖維様外層ヨリ成リ、薄狀内皮  
ヲ貼裏ス、此内皮ハ、核粒狀物、及ヒ稀黄色素分子  
ヲ含メル、多角ノセルヨリ成ル

真皮ノ面ニ開ケル、汗管ヨリ、表皮ノ外部ニ、又一  
ノ道路ヲ生シ、而テ表皮ノ薄キ部ハ其道路直行  
スレモ、手掌、足蹠ノ如キ、厚部ニ於テハ、螺旋形ヲ  
為シ、漏斗狀口ニ終ル、此管口ハ、尋常ノ袖珍連斯  
ヲ以テ、手掌ト足蹠ノ微細ナル起線ノ尖頂ニ、一

列ヲ為スヲ看取スヘシ然レモ其他部ニ於テハ、  
斯ク容易ニ看別シ難シトス

汗腺ノ變態スル者ハ耳ノ條下ニ記スル所ノ耳

聾腺ヲ為シ、又腋<sup>甲</sup>下臭腺ヲドリ左ロリス、ダラン  
バヲダゼ、アキシルラ

ヲ成ス、此腺ハ腋下毛部ノ皮下結締組織、及ヒ脂

肪組織間ニ聚合シテ、直徑一「インチ半余ノ切片

狀ヲ成ス、其片ノ中心近傍ニ於テ、最モ巨大シ、周

圍ニ向テ、漸次ニ細小シ、爰ニ於テ、尋常ノ汗腺ト

為シ、此腺ハ黑人種ニ於テ、甚々能ク發育シ、其最

モ大ナル者ハ小豆大ニ至シ、此腺ハ暗赤色、或ハ

甲  
シラシニユラトリス  
ラマウ、ホア子ル

甲  
ソトル

帶黃赤色ニシテ、尋常ノ汗腺ノ如ク、球狀ニ卷廻

スル一管ヨリ成リ、其端排泄管ニ為リテ、皮膚ノ

外面ニ開達ス、此管ノ壁中ニハ無數ノ筋纖維

ヲ含シ、其管内ハ、褐色或ハ黃色ノ色素ト、脂肪分

子ヲ混合セル微細ノ粒狀物ヲ充盈ス、此腺ハ汗

ノ多量ヲ分泌スルノ他、強烈ノ臭氣物ヲ泌別ス、

蓋シ人種ニ由テ稍マ差異アルナリ

汗<sup>甲</sup>ノ液ハ、清澄水様ノ液ニシテ、酸性ノ反應ト、塩

味ヲ含有ス、此液ハ、蟻酸、牛酪酸、醋酸、及ヒ種々ノ

塩類ヲ含ム、就中、其塩ノ最モ多量ナル者ハ塩化

曾實謨タリ

皮脂腺

<sup>甲</sup>皮脂腺 セバシヨヅハ甚數多ニシテ、手掌足蹠ヲ  
 除クノ他、大概諸部ニ存在ス。此腺ハ多分毛胞ニ  
 連合スル者ニシテ、各自毛胞ノ周圍ニ、乃至八  
 箇ノ聚簇ヲ為シテ、真皮ノ上部中ニ包裡セラレ  
 凡テ其大ナル者ハ小毛胞ト共ニ存在ス、故ニ之  
 ヲ見ルニ、其毛胞ノ要ナルヲ、此腺ヲ凍クル如シ  
 又相反シテ、其小ナル者ハ對ヲ為シ、以テ頭髮ト  
 連合ス。其最モ大ナル者ハ鼻、耳殼、陰莖ノ皮膚、陰

甲

囊、陰唇及ヒ婦人乳輪ノ皮膚腺ナリ、各毛胞ト連  
 續セル腺ノ聚簇ハ、半透明ノ皮膚中ニ在テ、圓形  
 白色ノ体ヲ呈ハス、而テ其直径、十分線分一ヨリ、  
 半線余ニ至ルナリ

皮脂腺ハ、一箇、或ハ數箇ノ錢囊狀ノ胞ヨリ成リ、  
 而テ單腺ト複腺アリ、其排泄管ヲ毛胞口ニ開ク、  
 或ハ其大ナル者ニ於テハ、毛胞口ト共ニ、皮膚面  
 ニ開ク造構ハ、基礎膜ニテ限界シ、内皮ヲ裝貼ス  
 ル、纖維組織ノ軟弱ナル壁ヲ有シ、其内皮ハ粒狀  
 物ヲ含メル、多角ノ有棘セルヨリ成ル。此腺ノ腔

内ハ「セル」ト油球ヨリ成レ此「皮脂質物」トセバ「シ」  
 「ル」ヲ充以而テ又其「セル」ニ、只油質ノミヲ含テ、膨  
 脹スル者ト、油滴ニ微細ノ粒狀物ヲ混合スル者  
 アリ  
 皮脂質物ハ、其發生スル所ノ毛髮ニ、油質ヲ粘着  
 セシメ、又々表皮ヲ滲透シテ、却水衣ト爲ス此物  
 質ニ歸セル、皮膚面ノ油性ハ、垢埃ヲ留着セシメ  
 易ク容易ニ其過度ヲ除クニハ、必ク石鹼ヲ用ユ、  
 然レモ過用セハ、表皮ノ油質ヲ損ヒシ、以テ皮膚  
 ヲ乾燥、及ヒ粗糙ニス、此質物屢濃厚ト爲テ、腺ヲ

腫脹セシムルヲアリ、蓋シ最屢顔面、殊ニ鼻部ニ  
 於テ然リ、而テ其管口ニハ、常ニ垢埃ヲ充以之ヲ  
 逼壓セハ、其管形ニ從ヒ、且ツ一端ニ、垢埃ヲ附着  
 シテ、突出スルヲ以テ、俗間ニテハ、那ノ蟲ト做シ  
 乃チ其端ノ垢埃ヲ蟲頭トセリ、又此質物ハ右等  
 ノ事ニ関セスシテ、健康ノ各人ニ於テ「ピ」ム「ブル」  
 マイトト稱スル、奇形ノ寄生動物ヲ含ム

毛髮

毛髮「ス」ハ「ア」ハ、皮膚ノ附属ニシテ、硬固ナル、線狀  
 ヲ成シ、手掌及ヒ足蹠ヲ除クノ他、大概諸部ヨリ

發生ハ其品、撓屈彈力性ヲ具シ、且ツ光輝アリ、然レ氏人種男女各人、及ヒ体中諸部ニ於テ、發育ノ度、並列ノ况、及ヒ其細纖色彩形狀ヲ異ニシ、而テ頭髮ノ長キヨリ、殆ト看ル能ハサルノ微毛ニ至ルマテ、其大サノ度、種々タリ

甲カビリ

毛髮ノ皮膚上ニ發出セル部ハ**毛体**フシヤ即チ**毛**

**幹**ムステニシテ**毛點**ポトイ即チ**毛端**ドエンニ終ル其

皮膚下ニ在ル部ハ**毛根**トルニシテ**毛球**ポルト

稱スル末端ノ膨大ヨリ、起始セリ、凡テ毛髮ハ只

々一幹、或ハ二三余、聚簇シテ、皮膚ヨリ斜生ス、而

乙ラギキス、ピル  
丙ポルビユス、ピリ

テ体中ノ諸部位ニ於テ、多分ハ各箇ノ一點ヨリ起リ、曲線ヲ為シテ、並列スルナリ

白人種ノ細キ絹狀ノ頭髮ハ圓柱狀ヲ為シ、鬚毛

ト、其他部ノ小毛、及ヒ黑人種ノ頭髮ノ如キ、脆弱

ニシテ卷縮セシ毛ハ、多少扁平ノ柱狀ヲ成ス

造構ハ、外皮、皮質、及ヒ内部ノ髓質ヨリ成ル

外皮キルクハ薄キ無色長方形ノ鱗屑、即チ全ク

扁平ナルセルノ單層ヨリ成ル、其形狀、恰モ數片

ノ葦板、相聚テ全屋ヲ蓋ヘル如シ、此鱗屑ノ挺出

スル縁ハ、毛幹ニ從テ、上外方ニ向フ、故ニ毛髮ヲ

顯微鏡下ニ檢スレハ、不整ノ波狀ヲ為セシ横行線ヲ見ル、又々是等ノ事ニ関セズ、鱗屑縁ノ挺出スルヲ以テ毛髮ノ一條ヲ二面間ニ挿シ毛根ヲ牽引スルノ他、諸方ニ運動セシムレハ、稍々障礙ヲ致ス、又々獸毛ヲ織成スル際、之ト同一ノ景況アリ

甲コレキス

皮膚<sup>甲</sup>プルチクルソハ最モ毛質ヲ為シ毛色ノ人種及ヒ各人ニ由テ異ナルハ、主モニ此質ニ属シ白髮ニ於ケル如ク、全ク透明ト為ルルハ、其質顯微鏡下ニ、縦線ヲ呈ハス、是レ撓屈性纖維ノ層ヨ

リ成リ、此纖維ハ線狀ノ核ヲ有セシ、甚々細長ナル、紡錘形ノセルヨリ成ル、而テ屢々毛髮ノ乾燥セシキ、或ハ之ヲ摩擦セシ后、毛端ニ於テ多少分裂ヲ為ス

毛髮ノ色素ハ尋常、皮膚中ニ沈延ス、然レ屢々線狀、或ハ斑點ト成テ蓄積スルヲアリ、一般ニ老年ニ於テハ、此色素ノ消耗スルヲ以テ、皮膚ヲ白色ト為ス

甲メジユラ

髓質<sup>甲</sup>メジユラ、ハ屢々缺凶スルヲアリ、暗色ノ頭髮及ヒ、体軀ノ微細ナル、纖維ニ於テ、殊ニ然リ

此物毛軸ヲ充タシ、透徹光ヲ以テ、看取スレハ、暗色ニシテ粗糙ナル、粒狀線ノ如ク、而テ尋常同等ノ横徑ヲ有スレド、屢、絞窄ヲ呈シ時トノハ、其中途ニ於テ全ク断絶スルコトアリ又反射光ニ由テ、看取スレハ、白色ヲ呈ハス、然レド上層ニ於ケル、皮質ヲ透視スルガ故ニ、稍、變色セザルヲ得ス此質ハ、粒狀物ト、不明ノ核ヲ有セシ、殆ト方形ノセ、此ヨリ成ル者ナリ、  
 允テ髓質ハ、毛端ヨリ竄入シテ、小胞ヲナセシ、多  
 少ノ空氣ヲ混合ス此質、白髮ニ於テハ、其微タル、

甲ヲリキエロスベリ

銀色ノ光澤ヲ賦與ス

毛根ハ毛胞

リヘア、  
ト稱スル、

皮膚ノ壘狀ノ凹

窩ニ入ル、其底ニ於テ、乳膏アリ、是ヨリ毛髮ヲ發

育ス毛胞ハ、真皮中ニ、被色セラレ、或ハ大毛ニ於

テハ、延長シテ皮下結締組織、及ヒ脂肪組織ニ至

ル、是レ畢竟、皮膚ノ彎曲シテ成ル、皺襞ニシテ、其

底ニ於ケル、毛髮乳膏ハ觸覺乳膏ノ變態ナルト

看取シテ可ナリ

毛胞ノ壁ハ、基礎膜ヲ以テ、限界スル、纖維層ヨリ

成リ、彼ノ表皮ノ彎曲シテ成ル、皺襞ヲ以テ、貼裏

此彎曲ノ表層部ハ尋常皮膚ノ遊離面上ノ表層トハ著シク變態シ、較厚キ透明彈力膜ヲ成シ、其膜ハ稍ヤ長形ナル、無核ノセル有孔膜狀ヲ為シテ、互ニ粘着シ、以テ成ル此彈力性表層ハ、其下ノ軟層中ニ融合シテ、密ニ毛根ヲ掌握ス、恐クハ此層乳膏ヨリ、毛髮ノ發生スルニ從テ、毛根ヲ壓進シ、恰モ引板ヲ通シテ、鏡線ヲ擗出スル如ク為ス可シ

毛髮乳膏

此ハ其構造ハ、其造成、糜弱ナリ、而テ橢圓形ヲ為シ、毛細管ト、神經ヲ含ム毛球ハ、此乳膏ヲ圍

甲ハヒラヒリ

擁スルカ故ニ、毛髮ヲ抜ケハ、乳膏ヲ牽引シテ疼痛ヲ起スナリ

毛根ハ毛幹ヨリモ、柔軟且ツ太トシ、然レモ發育シテ、幹ト為レハ、其性質ニ化ス毛球ハ柔軟透明ニシテ、毛髮乳膏ノ底ニ於テ、毛胞ノ表皮層ト、連合スル柔軟多角ノ有核セルヨリ成リ、此セルハ逐次ニ、上部毛根ノ外皮ト、皮質及ヒ髓質ニ轉徙ス

件ノセル其前記ノ諸質ニ變形スレハ、又從テ乳膏ヨリ、新セルヲ產生シ、以テ毛髮ノ成長ヲ持續

スルナリ

毛髮ハ表皮ノ如ク其營養質ヲ資ル<sub>レ</sub>亦タ吸收ニ由テ致ス而テ其液ヲ一ノセ此質ヨリ他ノセ<sub>レ</sub>ニ送り全毛中此ノ如クシテ逐次ニ其量ヲ減少ス

毛髮ハ健康体殊ニ病後ニ於テハ絶ヘス發育シテ補續スルノ他尙オ一條全ク脱落シテ更ニ新條ヲ生ス是レ毛髮ヲ拔除スル<sub>レ</sub>氏ニ於ケル如ク其新條ハ從前ノ毛胞ヨリ生<sub>レ</sub>又稀ニ新乳管ヨリ生スル者アリ屢老年ニ起<sub>ル</sub>所ノ持久セル剥

甲ヲギニス

禿ハ毛髮乳管ノ萎縮ニ起因ス  
死後ニ於テ鬘毛ノ假ニ發育スル如キハ其實全ク本態ニアラス唯皮膚ノ陥没スルニ由テ此毛根ヲ突出スル者ニシテ大約八分一<sub>ハ</sub>ニ<sub>テ</sub>突出スル者ナリ

爪

爪甲子ハ角質ナル皮膚ノ附屬ナリ猶オ獸類ノ爪蹄ニ於ケルト同シ而テ薄ク<sub>ハ</sub>ツ撓屈性アル透明長方ノ板ニシテ表皮ニ連合シ爪母ニ<sub>テ</sub>ト<sub>リ</sub>即チ爪牀ドハト稱スル真皮ノ凹面上ニ安置ス

爪ノ露出スル部ヲ爪体ボト云ス其前部ハ遊離縁ルフドリルボニ終ル爪根トト稱スル爪ハ後  
 玄三分或ハ四分ノ一ハ爪母ノ深溝ニ入り側縁  
 ハ淺溝中ニ受容セラレ爪体ヨリ根ニ向テハ逐  
 次ニ薄變シ終ニ銳端ニ至リ側縁ハ甚々忽然ト  
 外方ニ薄變ス

爪ハ透明ナルニ由テ爪母ノ赤色ヲ呈ハス其色  
 ハ此部ノ血管ニ富饒スルニ歸ス爪根ニ於テ爪  
 母ノ血管ヲ減少スルハ半月狀線アリテ限界シ  
 乃チ甲半月体ユリユニト稱スル白點ヲ生シ爪体ノ

甲セリユニユラ

遊離面ハ光輝アリ幽微ノ縦線ヲ呈ハシ其下面  
 ハ同方ノ細溝ヲ有ス

爪母ハ真皮ノ甚々血管多キ部ヨリ成リ饒多ノ  
 乳管ヲ有スル微細ノ縦起線ヲ密布シ此起線ト  
 乳管ハ爪ノ下面ノ溝中ニ入ル是レ他部ノ觸覺  
 乳管ト同一ナリ

爪ハ浸漬ニ由テ表皮ト連續シテ真皮ヨリ脱落  
 ス是レ真皮ニ一ノ軟層ヲ以テ附着スル厚キ角  
 質ノ層ヨリ成ル者ナレハナリ

角質層ホルルニルハ表層ト同一ニシテ扁平ナル

解

甲  
不  
ト  
レ  
ト  
ム  
マ  
ル  
ヒ  
キ  
ー

有核<sup>レ</sup>セル即千鱗屑ノ數多密着セシ板ヨリ成ル  
 是唯々亞爾加里類ノ如キ化學的試藥ヲ用ヒテ  
 顯微鏡上ニ區別スルヲ得可キ<sup>三</sup>  
 軟層<sup>甲</sup>ソフト、レハ表皮ノ軟層ト同一ニシテ軟弱  
 多角ノ有核<sup>レ</sup>セルヨリ成ル此<sup>レ</sup>セルハ常ニ角質層  
 ノ鱗屑ニ變形シ又從テ絶ヘス真皮面ヨリ之ヲ  
 補給ス爪ハ其根ニ於テ<sup>レ</sup>セルノ増加スルニ由テ  
 成長シ又下面ニ其附着スルヲ以テ厚積ヲ増加  
 スル者ナリ

味官

此官ノ具ハ既ニ舌ノ部ニ記載セリ

解剖訓蒙卷之二十終



發以書報

大德二年春林直書

茲并吉六齋

中

1844

1844

1844

茲蒙義舍蘇政

